

私とギリシア語のおつきあいのしかた

村田 奈々子

ロシア史を専攻しようと考えていた私が、18世紀末のロシアの女帝エカテリーナ一の南下政策のごとく、その目標をギリシアに向けてエーゲ海に進出し、腰を落ち着けてからもうすぐ10年もの年月が過ぎ去ろうとしている。いまだにロシア語の美しい、深い響きに後ろ髪をひかれつつも、喧嘩しているかのごとく叫ばれているギリシア語のほうに、今ではすっかりなじんでしまっている。特に1995年から96年のギリシアのテッサロニキへの留学の経験は、ギリシアの近現代史に対する尽きない魅力を私に実感させてくれたと同時に、生きたギリシア語とそれを話す現代のギリシア人に対する関心を与えてくれた。

思えば、大学2年時の冬、西洋史学科の先輩たち2人の勉強会にまったくの興味本位で参加したのが、私とギリシア語の出会いだった。彼らは、19世紀初頭のセルビア蜂起でのギリシアとの共闘計画のテキストを読んでいて、それはギリシア語で書かれてあり、私は成り行きで次回に数行訳してこななければならない羽目に陥った。文法はおろか、単語ひとつ、しかもギリシア文字は数学で使用するA, B, Γ, Σ, Πくらいしか知らなかったのだから、わずか2行を解読するのに5、6時間はかかったことは容易に想像できるだろう。その頃の私にとってギリシアは古代の遺跡のイメージを超えるものではなく、まさに化石になってしまった国に過ぎなかった。したがって、19世紀のギリシアの状況については、どう頭をひねっても、「オスマン帝国支配に隷属するギリシア」という教科書的な言い回し以外見当もつかなかった。それでもどういうわけか、それ以来私はその勉強会にはまってしまい、現在までギリシア語を読み続けている。もちろん、幸いにして今ではさすがに2行に5時間かけるということとはなくなっただけでも。

さて、留学を終えて1年以上たち、毎日ギリシア語にどっぷりついていた生活とはおさらばしてしまったわけだが、私は現在でも、おおよそ3つの場面

でギリシア語とのおつきあいを続けている。ひとつは、東京近郊のギリシア人との交流。ふたつめは、ギリシア語を教えること。そして3つめとして、研究上ギリシア語を読む必要があること。ここではそれぞれの場面で私がどのようにギリシア語と接しているのかを紹介する。

ギリシア人との交流

東京近郊には私が想像していた以上にギリシア人がいるらしい。ギリシアから帰国して以来、様々なついでで芽づる式に、10人以上のギリシア人と知りあいになった。彼らすべてと日常的につきあいが続いているわけではないが、少なくとも、週1回は何らかの形で彼らのうちの数人とはコンタクトをとっている。そのほとんどが留学生なので、一時的に日本に滞在しているに過ぎない。日本人の彼女ができ、1年で流暢に日本語を話すコスタスもいれば、1年以上滞在しているのにほとんど日本語が話せず、修士課程でコンピュータについて学ばずが、今ではすっかり日本社会批判の社会学者になってしまった感のあるヴァシリリスなど、実に彼らはユニークである。また、移民供給国ギリシアらしく、ギリシア系オーストラリア人、アメリカ人、そしてドイツ人といったギリシア系〇〇人にも出会った。彼らのギリシア語能力は、各々の家庭や地域のコミュニティでどのくらいギリシア語を使用しているかに大きく左右されている。本国のギリシア人と変わらないギリシア語能力を持つ者から、ギリシア語よりも育った国の教育言語で思考し、話したほうがずっと楽だと言う者までその段階は様々である。そのようなわけで、日本にいながらにして私はバラエティに富んだギリシア語、しかも口語に触れる機会に恵まれている。これは考えてみれば実に幸運なことで、私自身のギリシア語会話を維持できると同時に、辞書にはない新しい語彙を増やすことができる。加えて、彼らの思考のしかたの一端も垣間見ることができる。ストックキングが伝線した時の Έφυγε ο ποντικός。「ネズミが出てった」という表現や、トイレで用を足した後の、「さっぱりした」に相当する ξαλάφρωσα という表現を覚えた時はすごく得した気分になった。(ちなみに、ξαλάφρωνω は「安心させる／する」が第一義で、辞書では ξαλάφρωσα βλέποντας τον να έρχεται。「彼が来るのを見て私は安心した。」というおりこうな例文が挙げられている。)もちろん、彼らと会っているのは、あくまで友達としてであって、会話の勉強を第1の目的としているわけではないので、話している時にいちいちメモをとったりすることはまずない。彼らが日本語で話したければそうする。それでも耳に入ってくるギリシア語の表現のいくつかは記

憶に残り、それは私の表現の中に取り入れられていく。唯一の例外は、日本批判を長々と論じるヴァシリスとの電話での会話だ。そのときばかりは、どうせこれから1時間は止まらずに話し続けることを覚悟をしているので、相づちをうち、反論するときは反論しつつも、右手にはしっかりペンを握って役立ちそうな表現をメモすることになっている。

ご近所に住んでいるアナスタシアと私との関係は、他のギリシア人との関係とは少し違う。私は彼女に授業料を支払って、彼女からギリシア語を習っている。もちろん普段は友達であり、しばしば日本人と結婚している彼女の相談を、同じ主婦の立場で聞いてあげることもあるが、やはり授業は授業としてけじめをつけることにしたのである。毎回彼女にはギリシア語で書いた日記や作文を添削してもらい、残りの時間は新聞や雑誌からお互いの興味のあるテーマそった会話をする。ギリシアの慣習についてもいろいろと教えてもらう。普段の会話ではちょっとした間違いや日本語的な発想に由来する奇妙な言い回しをいちいち指摘されることはないが、授業では「ギリシア人らしいギリシア語を話す」ことに焦点を置いているので、彼女は事細かに注意してくれる。私のほうも授業中は真剣に取り組むことができるのである。

ギリシアから帰国する時、日本で口語ギリシア語に接する機会がなくなることや危惧していたけれども、どうやらそれは杞憂であったようだ。もちろんギリシア語を話す機会は極端に減少してしまったけれども、まったくゼロになってしまったわけではない。それは彼ら東京近郊のギリシア人のおかげである。今のところ唯一のぜいたくな悩みは、看板など日常目から入ってくるギリシア語がなくなってしまったことである。そのせいか、以前は間違ふことのなかった簡単な綴り方でミスを連発するようになってしまった。視覚と語学習得には私が考えもしなかった重要なつながりがあることを実感している次第である。

私のギリシア語教授法

さて、ギリシア語を習う一方で、大胆にも97年の4月からギリシア語を教えはじめた。とはいっても、カルチャーセンターで教えるといった大げさなものではなく、東京都立大学の学生たち4人との勉強会という形でこじんまりとおこなっている。ギリシア哲学専攻の院生、エジプトの文化人類学専攻の院生、近代ギリシア史になんとなく興味をもちつつある学部生、日本における正教について研究しているモスクワからの留学生と、メンバーの構成もおもしろい。彼らの目的も、趣味程度から文献講読まで開きが大きい。うえ、ギリシア哲学の

院生は古典ギリシア語を知っているし、ロシア人もギリシア語にはなじみがあり、スタートの時点での差は歴然だった。それでもみんながひきめを感じることなく、楽しく勉強できるようにと、読むよりも話すギリシア語に主眼を置くことにした。もちろん、週に一回という限られた時間で、できるだけ多くの文法を教えて、文献を読めるようにしてあげるのが、よい先生たるものの姿なのかもしれないが、私の経験からいって、文法詰め込み型の語学の授業ほどつまらないものはないし、あれほどすぐに忘れるものもないのである。古典語の学習ならともかく、今現に話されている言葉ならば、初心者にとっては話しながら、笑いながら体で覚えるのが一番だと思っている。そうすれば、文法も徐々に身につけていくものだ。初心者にとってこの方法は進み方も遅く、まず「文法ありき」で変化表一覧がなくてはどうも落ち着かないという方には向かない。授業で主に使用しているのは、カセットテープつきで、口語表現が多様され、簡単な練習問題も多い教科書<ΕΛΛΗΝΙΚΑ ΤΩΡΑ 1+1>であるが、通算半年で、やっと5課を終了したというところだ。この教科書だけでは飽きてしまうので、セサミストリート方式（つまり次々と場面が変化するということ）で、語学教科書マニアの私がギリシアで買い集めた教科書からの抜粋、子供用のギリシア神話や雑誌の漫画を、文法の進度も無視して、いきなり読んでみたり、ギリシアの歴史や現状についてお話したりと、短時間（90分）でかなり多くのことをしている。テキストの中の新出の単語についてはあらかじめ私がコピーを用意しておくことにしているが、「私はオレンジジュースが欲しい」程度の文法しか知らなくても、もっと複雑な文章がある程度の説明でなんとなく読めてしまうものなのである。言語教育の専門の方の意見を聞くのは恐ろしいが、とにかくこの方法で、彼らは確実にギリシア語とはどのような言語であるのかということを理解しはじめている。そしてここまでくれば、もう一歩踏み出すのはずっと楽なのではないか思う。もちろん彼らは、今すぐにギリシア旅行をしても、とりあえず困らない程度のギリシア語を既に会得している。

ギリシア旅行の話がでたところで、宣伝させてもらうが、名古屋大学文学部助教授の周藤芳幸氏と私の共著で、97年10月に「250語でできる現代ギリシア会話」を白水社から出版した。約1年かけて完成した本書は、ギリシアへの旅行者を対象にしている。文法の説明は極力控え、会話はできるだけ簡単で便利なものに限定し、各課末の現代ギリシアについてのミニ情報というべきコラムは、読み物としても楽しめるように工夫した。2004年のアテネでのオリンピック開催に向け、ギリシアへの関心が日本人の間でも高まることが期待される

が、本書がギリシアとギリシア語を知るためのお役にたてるとよいと思っている。

なお、現代ギリシア語の実力を判断する検定は、日本ではおこなわれていないが、現在 EU 加盟国の各言語について、加盟国のいくつかの大学が提携して、年に1度、5月頃に検定試験が実施されている。ギリシア語については、テッサロニキ大学付属の語学学校でのみ受験が可能である。難易度は初級のAからB、Γ、Δの4つに分かれ、それぞれにつきヒヤリング、筆記、面接試験が同日におこなわれる。合格すれば正式な証明書が発行される。受験に関しては、滞在許可などの証明書は必要ないので、旅行がてらに、ギリシア語の腕だめとして受験してみるのもいい。

研究とギリシア語

最後に私自身の研究とギリシア語についても簡単に言及しておこう。19世紀、特に最近ではオスマン帝国下の北ギリシアの情勢に興味を持っているのだが、研究書はともかくとして、問題なのは、史料の中には、カサレヴサ、あるいは古典語で書かれているものが多いということである。古典ギリシア語を読める方が、現代ギリシア語を読むのはさほど難しいことではないと推測するが、その反対の状況は、まったくもって至難の業としかいいようがない。文法の複雑さは現代語の比ではない。文法に関しては一応独学したもの、習得したとは言いがたい。これではマズイと、西洋古典学の優秀な某友人にお願いして、ご教授願ったのだが、出来の悪さに呆れられ、発音に至っては、つい現代語風に読んでしまうため、「なに、そのキタナイ発音！」とお目玉をくらう始末である。調子のよい時はスラスラ進むものの、まったくお手上げの時もあり、とにかくこの格差を縮めるのが研究上での私の緊急の課題となっている。

ギリシアがオスマン帝国からの独立を達成した19世紀初頭に、当時流動的であったバルカンの民族概念に対して、ギリシア語を話す者を「ギリシア人」とみなすという考え方が示された。ここからも明らかなように、ギリシア語は彼らギリシア人のアイデンティティの拠り所であり、その精神は現在まで保たれている。彼らは、ギリシア語の気の遠くなるような語彙の豊富さを自慢し、It's Greek to me. という表現をひきあいにして、その難しさを誇る。確かに、ギリシア語は難しいかもしれない。しかし、それはどの言語にもある程度あてはまることであって、何もギリシア語に特有のものではない。

私にとってギリシア語は、「難しい」とひとことで言い切るほど無縁なものではなくなってしまったが、だからといってそれを自由自在にそれを操つれるほど私は器用ではない。あくまでギリシア語は私にとって外国語であり続ける。それでも、おおざっぱで、ストレートに感情を表す性格のため、ギリシア人の友人だちに、Είσαι όντως Ελληνίδα「ホントにギリシア人だね。」と冗談半分に言われている私は、これからもギリシア語とのおつき合いをしばらくは続けていくであろうし、そこから様々な新しい発見ができるのではないかと楽しみなのである。